

まつりもののけ

——昔、まだ幼い村の子供が、悪しきもののけに取り憑かれてしまった話は知っていますか？

——人々への恨み辛みを募らせて、その子はやがて、災いの神様になりました。

——長い年月が経って、荒れ果てた世界と暴れ狂うもののけを見て、遠い国の王様が涙を流していました。

「…この冷たい暗闇が永久に続くなら、いつそ災いの神と共に滅びよう。

皆の目を覚ます光が訪れないのなら、僕が火となり、太陽のように燃え盛ろう。

さようなら、真夜中の王国。」

真夜中の王国

「…誰か来る」

深い深い真夜中に、甘く焼けるようなガソリンの匂いが漂っていました。昨日までの世界と、何ら変わりのない一日の始まりです。けれどもそれに混じって、鉄の塊のような強烈な異臭が鼻の奥を刺激しています。これは、いつもの事ではありませんでした。

不思議に思った少年は、青い鱗の輝く羽織りを揺らして、とても高い煙突の縁から立ち上がりました。見晴らしの良いその場所から鼻を効かせてみれば、過ぎ去る日々に突如打たれたこの特異点の正体が分かると思ったのです。そうして目を光らせていると、なんと三つ隣の煙突の上に、少年と同じように誰かが立っているではありませんか。あまりに驚いて、少年は目を見開いて暫くその姿を凝視していました。

三つ隣と言っても、煙突と煙突の間は十五尺以上離れています。更にこの煙突の先端というのは、地上一帯を見下ろせるほどの高所まで伸びていたのです。普通の人なら上ることは愚か、立ち上がるなんて勇気どころにも持ち合わせちゃいはずなのです。それでも少年は自分の他に誰かがいることが嬉しくて、それはそれは嬉しくて、

軽いステップを踏むように空中を飛び越えてみせました。だって彼はもう、二百年もこの暗闇に孤独であつたのですから。けれども、隣の煙突へ、さらに隣の煙突へ飛乗る度、先程の血腥い臭いは一層強くなつていきます。やはりどう考えたつて、この臭いはその人影から放たれているものでした。いつしか少年の心内は、誰かと出逢えた喜びよりも、危機本能のような恐ろしさを感じていました。

とうとう一つ横の煙突までやって来てしまいました。今日は風が強い日でしたから、お隣さんが身につけている唐草模様の長い首巻がひらひらと靡いています。その人は背を向けて、頭には大きな獅子の頭ずを被り、少年のことを気づいているのかそうでないのか、少しも動かずそっぽを向いたまま黙りこくつていました。しばらくして、強い風が一瞬びたと止みました。少年はその時初めて、その者がすすり泣いていることに気が付きました。

「もし、訊ねたい。一体どうして泣いているのだ。」

びくりと小さな肩が跳ね、少女はゆつくりとこちらへ振り向きしました。少年の足がすくみます。体も石のように固まつてしまいました。何故なら少女の口周り、そして両手のひらが黒く血塗れだったのです。

「とても悲しいことがあつたのだ。」

少女はあまり開かない小さな口で、確かにそう言いました。無垢な、澄んだビー玉のような青い瞳が少年に語りかけるように光っています。

「お腹が空くといつも気を失って、気がつくとか何か赤いものを食べている。それは鉄の匂いが酷くて、不味くて不味くて泣いているのだ。」

少年は何も返事を出来ずにいました。それもそのはず、少女の言う「赤いもの」の正体こそ、彼女の手にこびりつく血の塊だからです。少女はそれを食べたと言います。そして、そんなことができる存在にも一つ心当たりがありました。

「もしや、あなたはマガツヒ様ではないだろうか。」

恐る恐る、少年は声を振り絞りました。

「あなたの噂は隣国から、そのまた隣国からもきいています。人も物も全て喰らい、大きな災いをもたらす神様がいます。その血、その獣の被りもの——」

「そうだ、私だ。」

少女が冷淡にそう答えた時、梅のような酸味の強い臭いが、また鼻腔の内壁にひたひたと染み込んできました。少年は口と鼻を抑えてしゃがみこみます。少女の姿をした恐ろしい神様は、先程まで泣いていたとは思えない淡白な様子で、静かに話し始めました。

「これは血液と死肉の臭い。私が人を食べたのだ。人だけではない、家畜も、草木も、建物も、全て喰らった。」

少年は眉根を寄せて言います。

「そんなことをしたらこの世の全てが無くなってしまうじゃないか。あなたは知らないかもしれないけれど、隣の国も、そのまた向こうの国も、厄災を招くあなたのことを恐れ皆怯えながら生きている。」

どうかこの地獄に終止符を打ちたくて、少年は相手が神様だということを承知で頭を下げました。生き物の命を簡単に奪うようなことは、たとえ神様であつてもしてはならないはずなのです。

「どうかもう、凄惨なこととはよして鎮まりください。それでも心が変わらぬというなら、僕はあなたに——」

「おい、小僧」と冷たい声色で厄神が話を遮りました。

「一体なんの話をしているのだ。」

「——え」と少年は口からひゅつと息を漏らして目を見開きました。

「私は隣の国の、そのまた向こうの国の、ずっと先からやってきた。この意味がわかるか？」

「ま…まさか、既に隣の国まで喰らったと、そう言うのか！」

少年は声を荒らげましたが、少女は少々眉をひそめて奇妙なものを見るように「ああそうだが」と続けます。

「そんなこと、気が触れるほど遠い昔のことだ。私はここ数年のあいだ、国境に沿って現れた出口の無い暗闇を彷徨い続けていた。そしてようやくこの国に辿り着き、今、お前さんと話をしている。何故隣国の状況を数年間も知ることなく過ごしているのだ。」

一拍置いて、少女は続けて言います。

「それにここは様子がおかしい。」

唐草模様の首巻に口元を埋めて町を見下ろすその姿に、何故だか少年の胸騒ぎが収まりません。なにか大事なことを忘れているような、そしてその記憶が今、この少女によって呼び起こされている…そんな感覚です。

「この国にやってきて確かに日は経つ。しかし人つ子一人見かけん上にいつまで経っても陽が昇らない。なあ、匂うのはそちらの方なんだよ。」

ぎょろりと大きな目がこちらを見ました。その頭にある獅子の目も、少年を見ているようでした。瞬く間に突風が吹いて、少年は咄嗟に目を瞑りました。

「——あなたは誰だ？」

遠くでぼんやりとそんな声がして、次に瞼を開けた時、少女は目と鼻の先まで迫ってきていました。真つ青な両眼に覗き込まれて、少年は思わず足を滑らせてしまい、そのまま煙突から落下して、建ち並ぶ廃工場の暗闇の中へと吸い込まれていきました。

「——まるで、飛んでいるようだ。」

失いかけていた意識を取り戻した少年は、重力に従ってゆつくりと落ちていきます。その体に、少女の生ぬるい腕が巻きついて、することに気がついて、少し目を伏せました。もう、あまり怖くはありませんでした。

「このまま二人で消えてしまえたら、世界は祝福の歌でも歌い出すだろうか？」

少年が言いました。冷たい空気が塵と混ざり、きらきら光って見えました。足先で、尾鰭がゆらゆらと靡いています。ゆつくりと空が遠ざかり、綿毛のように落下していく少年に、「悪いが」と少女は重たい口を開きました。

「それを望んだとして、私の腹の中にいる厄災の神があなたを喰らうことはないだろう。」

空の暗闇は、二人が落ちていくにつれてどんどん濃くなっていきました。その代わりに、見えてきた目下の廃工場跡地にオレンジが散りばめられて光っていました。それがまるで、星屑のように見えました。

「この国に足を踏み入れてからというもの、一度も空腹を感じない。ひょっとして、マガツヒはあなたの国を気に入ったのではないのだろうか。」

カコンと音を立てて、二人は穴の空いた天井の吹き抜けから二階の床板に着地しました。こちら一帯はほぼ全壊状態で、建物ごと半分に切り崩したように断面が見えていました。そのコンクリートの端や錆びた鉄パイプを伝って、ちろちろとガソリンが流れています。

「…そうか。だとしたら歓迎しよう。まさに僕は君を探していたのだから。」

「何故？」

「僕一人では適わない、文字通り神頼みでもしないと、どうにもならぬことがこの国で起こっているのだ。」

少年は素足を鳴らして少女の眼前に立ちました。その額には強い覚悟と少しの恐怖

が、嫌な汗として滲んでいました。ぴつたりと両足を揃えて、長い羽織の尾緒を揺らし、少年はその場に跪いて見せました。

「以前、どこかで聞いたことがある。厄災の神とは穢れを司ると同時に、褻払いの力を持ち、祀る者の願いの一つだけ叶えてくれると。…禍津日神に願う。夜明けのこないこの国に、僕は朝日をもたらしたい。」

語気を強めて、少年は深く頭を下げました。しばらく黙っていた少女は「随分寂しいことを言うのだな」と誰にも聞こえない雑草のような声で呟きました。目の前で頭を垂れる少年が、何を言わんとしているのか理解したのです。

「私が祈れば、あなたの願いも叶うだろう。ただしそれには代償がある。あなたはそれを払えるだろうか。」

少年は顔を上げました。少女の顔に二つくつついている目玉がこちらをじつと見つめていました。口元は首巻の中に仕舞われて、血痕のような赤だけが見え隠れしていました。少年は一度くんと喉を鳴らして「承知の上だ」と言い切りました。

「この国を太陽が照らし、人々が共に支え合う国にしたい。その為ならば、僕はこの命すら惜しくない。」

とても長い時間が経ったような気がします。少年の声は瓦礫から瓦礫へ木霊し、反

響して尾を引きました。それが全く聞こえなくなる頃に、少女は一度しんと目を瞑りました。そして、強く両手を組み合わせました。

「——あなたの願いを叶えましょう。」

まつりのもののけ

「これが己の命を代償にしても救いたい国か。確かに、どこを見ても暗闇だ。」

廃工場の屋根から伸びる錆びた太い鉄パイプが、みしりと鳴りました。何重も張り巡らされた木の枝のようなパイプのうんと遠くに、先程の煙突が亡霊のように聳えています。よく見れば、先端から煙のような、雲のようなものが出ているような気がします。でこぼことした一直線のパイプの上を進みながら、少女は大きな大きなその国を見渡して言いました。

「しかし、あなた一人いるだけでは国とは言えないだろう。」

少女の前を迷うことなく歩く少年が、振り返らずに答えました。

「夜の間は皆眠っている。日が昇れば、それは素晴らしい国なのだ。」

彼の片方の手には、ぼんやりと蠟燭の火が揺れています。まるで芯のない、確信の持てないことを無理やり言い切るような返事でした。もうほとんど覚えていないはずのこの国の朝の景色を、彼は強く信仰しているようでした。

ぼたりぼたりと、頭上からパイプを伝ってガソリンが流れています。廃工場の立ち並ぶこの闇夜をかううじて照らしているのは、今宵となつて足元に垂れた、甘く焦げ

るような匂いのガソリンです。この液体は僅かにオレンジ色に光っています。少年が上手にそれを避けてゆくものですから、少女は敢えて足先をその液体にちゃんと付けてみました。それはとても熱くて、ぴりりと焼けるようでした。

辺りはずっと先まで瓦礫の墓場です。坂道でもないのに、建物も、鉄パイプも積み上がるようにして上へ上へとどんどん上っていきます。二人はこのスラムのような地の、最下層まで落ちてしまっていたようでした。

「禍津日神よ、太陽はここからうんと先のあの森の裏から現れるのだ。」

少年は最後のパイプをのぼりきって言いました。冷たいコンクリートの上で、夜風を一身に受けています。やはり少し記憶に自信がなさそうでした。

「うつすらと青い曙が綺麗で、その景色を君にも見せてあげたい。そしたらきつと……。」

飲み込んで無くしてしまったように言葉が途切れました。限られた言葉で語るよりも、目の前に広がる巨大な廃都市が、何かを強く訴えかけているようでした。

「……それで、僕はどうすればいい。」

そう聞いた少年の横に立つて、少女は王国の先を見据えます。高い高い煙突が国境のように聳える奥に、鬱蒼とした森が見えます。

「願いを叶えるために、まつりと呼ばれる儀を行わねばならない。森林の中にある、直径三十三尺の平野を祭壇とし、舞を捧げる。成功すれば禍津日神が目覚め、祈りに応えてくれるだろう。」

「失敗すれば？」と少年がききました。

「いくら舞い踊ったところで夜明けは拝めないだろうな。」

静かに息を吐いて少女はその場に座り、足をふらんと放り出しました。

「今まで何人もの人間の願いをきいてきた。金が欲しい、村を飢饉から救って欲しい、跡継ぎが欲しい……だが、成功したのはほんの一握りだけだ。運良くまつりまで成せたとして、禍津日神がそれに応えることは無く人間だけ喰らって終わってしまうことの方が多い。厄災の神に、人々の願いを叶えるなどというたいそれたことが本当にできると思ふか。」

まるで怒っている口調でした。少女は続けて、「私には、奴が災害の渦の目としか思えない」と険しい顔をしました。

少年は気づきました。まるで禍津日神とこの少女が同じ存在であると勘違いしていたような気がします。隣国や食い荒らされた村と同様に、少女もその「災害の被災者」であつたのです。けれども今までそうとも言いきれなかったのは、彼女の仕草表

情の端くれに、どこか不気味な獣の臭いが漂っていたからです。もはや彼女は、完全な人間ではなくなってしまうているようでした。

「…名前は？」

少年が呟きました。りと鈴の音が聞こえてくるような速度で、少女が驚いて振り向きます。

「君のことを、禍津日神と呼ぶのは違うだろうから。」

不思議な感覚です。神様ではなく、人として扱われた記憶はもうありませんので、少女はそれは驚いて目を見開いたのです。しかし、すぐにその表情は曇ってしまいました。

「覚えていないのだ、すまない。マガツヒに憑かれる前のことは、全て忘れてしまった。なんせずっと昔のことだから…」

話しながら、少女は顔を上げて少年を見ました。

「ならばあなたがくれないか。」

少女の真っ直ぐな青い瞳がきらりと光ります。ただの幼い子供の瞳です。そこに神なんて巨大なもの、潜んでいるようには見えませんでした。

「不思議な王よ、これも何かの縁であろう。あなたが名付けてくれるなら、私はその

名のもとに余生を送ろう。」

少年は困ってしまいました。誰かに名前を付けたことなど、一度もありません。それどころか、ここ数百年誰とも話さなかったせいで、自分に名があったことすら曖昧です。それでも一生懸命考えて、少女を神様ではなく、一人の小さな友人にしたいと思いました。

「そうだな、マヨイというのはどうだろうか。君はここに迷い込んだ。真の宵の中に。」

「マヨイ、と呟いて、少女は大きく頷きました。」

「良い名だ、有難く頂戴しよう。それであなたの名はなんと申す。」

「名乗らないことにしたのだ、聞かないでくれ。」

「何故だ」とマヨイは首を傾げました。言い出しつぺの少年が名無しの権兵衛では、なんだかすつきりしません。

「僕はこの国の王である以上、王ではない僕を意味する固有名詞があつては、完全なる王にはなれない。」

「なんだか難しいことを言つて、少年は立ち上がりました。」

「マヨイ、あの森に祭壇はあるのか。」

「ああ、ある。どの国にも等しく、国境に沿った森の中に。」

びゅう、と強い風が吹き、少年の手にあつた蠟燭の火が消えます。遠くの森が、黒い絵の具を垂らしたような深い穴に見えました。

「ならば行こう。」

次の瞬間、少年の体がある場所からぼーんと投げ出されました。まるで飛んでいるように落下していく少年を、マヨイはある二つの眼でじつと見つめていました。そうして飛び降りた彼を追うように、廃材のコンクリートの崖から身を投げました。

重力に従って、下へ下へと落ちていく最中、星一つない夜空が視界を覆いました。雨雲が星々を隠しているわけではありません。不思議な空です。次第に先程登つてきたパイプが連なつて螺旋のように現れ、マヨイはその中心を沈んで地上へ着地しました。その振動で、ゆらゆらとガソリンの水たまりが波紋しました。

「しかし、あの森は広大で、どこに祭壇があるのか僕には分からない。」

マヨイを待つて歩き出した少年が、背中越しにそう言いました。ぺたぺたと硬い地面を進む足音がします。

「私にも分からない——」が、マガツヒには分かる。」

マヨイはぼつぼつと話し出しました。直径三十三尺の平野は、どの国にも必ず存在

する、謂わばその国を護る神域なのだ。普段は人が寄り付かないように上手に隠れていて、神様にだけ分かるようにその道が示されているらしいのです。マヨイの中にいる厄災の神が、道標となってくれるのでしょうか。

かなり長い間歩き続けて、ようやく硬い地面が土に変わりました。所々に生えた雑草は、前をゆくに連れて数を増やします。王国のシンボルであつた高い高い煙突からどンドン遠ざかり、やがて巨大な森林が目前に現れました。

「元気の無い森だな。」と、マヨイが青い木を見上げて呟きました。

「そうか？ これほど立派な葉をつけた樹木が、見渡す限りたくさんあるではないか。」

「そうだな、しかしなんだろう、どこか無機質だ。」

マヨイは一步、また一步と森の中へ入っていききました。その直後、あんなに変わらなかった空から、ぼたぼたと雨水が零れ落ちてきました。少年は初め、気のせいかと怪訝な顔で頭上を見上げていましたが、その少年の額に、たしかに一粒、冷たい水が降りかかったのです。オレンジではないですから、ガソリンではありません。透明で冷たい、雨でした。

「雨だ！」と少年が叫んだことを合図に、恵みの雨は優しいシャワーのように降り出

しました。しかし依然として雲はありません。限りなく黒に近い藍色から、雨水が涙のように溢れてくるのです。

「私たちを歓迎しているようだな。」

マヨイの被り物から生えた角を、雨粒が伝つて落ちました。暗がりの濡れた森には霧がかかり、気温はどんどんと下がり続けていきます。しかし不思議と悪寒はせず、それどころか少年はいきいきと気分が優れていくような感覚を覚えました。

その時、轟くようにびかんと空が光り、少しも経たずにすぐ近くで雷が落ちました。二人は驚いて顔を見合せます。

「落雷だ」と肩を竦めて少年が言いました。マヨイは少し考える素振りを見せて、「もしかしたら、雷が落ちたところに神域があるかもしれない」と伝えました。

雨足が強まる中、少年は咄嗟に彼女の手を引いて走り出しました。体が随分軽くなつたように思えました。数百年もの間、ずっと素知らぬ顔をしていた空模様すら変わったのです。これからもっと大きなことが起こる……そんな予感が、少年の体の中で翼を広げていました。

「あつた！」と、泥だらけの足が止まりました。マヨイは臆することなくその円形の平野に降り立ちました。一帯の草木を全て焼き尽くしたかのような、枯れ草だけが転

がる平野でした。異様な雰囲気なのは見て分かります。円の外には平然と逞しい木々が生い茂っていたので、二人のいる荒地はまるで、巨大な生き物の足跡から出来たような、そんな平野でした。

濡れた大地の真ん中で、マヨイは静かに瞼を閉じました。そして深く息を吸うと、両手を組んで天を仰ぎます。マヨイの被り物についた金色の瞳が、彼女の代わりに暗い夜空を見上げていました。

「…人を救うための祈りが、人の命を奪うなんて。祈りは呪いと紙一重……ということか。」

少年の願いをもう一度心の中で唱えて、マヨイはそんなことを思いました。

「あなたの祈りはあなたを呪う。再度問おう、それでも願うというのか。」

「そうだ、何度でも願うよ。僕はこの国の王なのだから。」

少年は長い息を吐き出して、マヨイの姿を見据えました。

「…しかし懐かしいな。以前誰かが、同じことを言っていたような気がする。」

独り言のように呟きながら、少年はあることに気が付きました。マヨイの影が、円の中心から伸びています。ふと空を見ると、どこから現れたのか巨大な月が夜空にぶつかりと浮かんでいるではありませんか。マヨイは月明かりに照らされて、とても長

く大きな影を作っていたのです。

「月？」と少年は目を見開いたまま佇みました。少し前までこの空には、暗闇がひとつ在っただけで星々なんて盗まれたかのようになんにもなかったはずです。そういえば、雨もすっかり止んでいます。

「ひとつ、思い出した話がある」と、少年が呟きました。

「月へ行った子……という昔話を知っているか？」

ぼつりぼつりと話し出す少年に、「なんなのだ、それは」とマヨイは振り返りました。

「罰当たりな子供が、月に攫われるという話だ。月面で舞うのは兎ではない、罰として水を汲む子供だ。僕の国ではこの童話を、大人が子供に聞かせるのだ。ちょうどこのように満月の日には必ず……。なのに僕は、たった今までそのことを思い出せなかった。」

暗く落ち込んだ表情で、少年は空の彼方に釘付けになっています。マヨイは浮かべていた笑みを寂しいものにして、「そうか」と相槌を打ちました。

「僕が愛したこの国を、僕はすっかり忘れてしまっていたようだ。ならば僕は一体、何を愛していたというのだろうか。」

頭を抱えて混乱している様子の少年を見兼ねて、マヨイは小さな口を開きました。

「あなたはこの国の夜明けを待っていたはずだ。さあこちらに来て。」

マヨイの手が少年の方へと伸びました。少年を、祭壇の中心へと誘っているのです。招かれるがまま、少年は尾鰭を揺らしながらマヨイの元へと向かいました。リン、リン、と、どこからか少年の足並みに合わせて鈴のような音が聞こえてきました。大地が、神々の住まう黄泉と繋がり彼の進む道を指し示しました。

「——闇夜を統べる小さな王よ、恐れることは無い。共に舞い、共に唄おう。」

マヨイは少年の両手を確かに握り、こつんと額を合わせて言いました。少年も彼女に倣い、そつと目を瞑りました。

「あなたに出逢えて良かったと、私は思っているよ。」

「マヨイ、ありがとう。君は僕の大切な友人だ。だけど、本当は少し怖い。」

少年はぎゅつとマヨイの手を握り返して、小さな小さな声で心の底を打ち明けました。

「昔のことをまたひとつ、思い出した。それは孤独の記憶だ。何一つ変わらない、夏の暑い日の記憶だ。その時はただ、今と真逆の事を——誰もが眠りにつく夜を、望んでいたような気がする。」

震える声色に、草木が呼応して揺れています。葉と葉の掠れる音が、優しく少年の耳に染み込んでいきました。

「もし、夜が明けても独りだったらどうしよう。」

幼い子供の一言が、やけに重く、強く周りに反響して行き渡りました。少年の言霊は空間に歪みができるほどの負荷をかけ、激しい頭痛にマヨイは崩れ落ちそうになりました。なんとか堪えて少年の手を更に強く握りしめると、「心配はない」と少年が不安にならないよう、笑ってみせました。

「最期の時まであなたの傍にいる。心細く思うことも無い。共に夜明けを見届けよう。」

瞼を開いて、二人はお互いの瞳を真っ直ぐに見つめました。マヨイの瞳の色は、青空のように澄んでいます。少年はその色に思いを馳せ、「ありがとう」とか細い声でお礼を言いました。

まるでその一言を待っていたかのような突風が二人の間を引き裂いて、吹き抜けて行きました。マヨイはくるとその場で回ってみせると、ぱんと両手を叩きました。それが「まつり」の、合図でした。

でんでらりゅうば

でてくるばってん

でんでられんけん

でてこんけん

マヨイが祭壇の円をなぞるようにして、唄いながら舞い踊り出しました。それは身軽に、くるくると回り、跳ねて、両手を天に翳して手招くように振りました。つま先が地面に触れる度、鈴の音は確かに鳴り響き、彼女の唄に合わせて音楽を奏でています。彼女の首巻が靡く度、風もひゅると吹きました。なんとも楽しげに、天真爛漫な笑顔を振りまいて舞っている少女に魅せられて、少年の体も不思議とくるくる動き始めました。

でんでらりゅうば

でてくるばってん

でんでらんけん

でてこんけん

足跡の代わりに、によきによきと緑の新芽が伸びて花を咲かせます。少女の声に、大地の全てが呼応しているのです。二人は祭壇の円周の上を、対極に立つて追いかけてつこをするようにして舞い続けました。それはまるで、太陽と月に見立てて一日を繰り返しているように見えました。太陽は月を追いかけて、月は太陽を追いかけます。二人の距離は長くても短くてもいいけません。この「まつり」は、舞を通して正確に時刻を刻むことに意味があるのです。

でんでらりゅうば

でてくるばってん

でんでられんけん

でてこんけん

こんこられんけん

こられられんけん

こんこん

こんこん

同じ唄を、何度も何度も繰り返して舞いました。次第に意識が遠のいていき、少年はぼやけた視界の端に赤く生え揃った彼岸の花を見ました。瞬間、キンと耳が傷んで世界が静寂に包まれました。もう走っているのかも、唄っているのかも、よくわからなくなりました。彼岸の花の奥に大きな鳥居が見えます。なんだか懐かしく寂しげな感覚に陥った時、遠くから蝸のキキキ……という鳴き声が聞こえて少年は気が付きました。空が茜に染まっているのです。もつと遠くは紫がかつて、地平線を隠すように立派な入道雲が浮かび、生ぬるい夏風が滑り抜けて彼岸の花を揺らしました。ぼたりと一滴、涙が頬を伝って零れ落ちました。それはそれは見事な夕焼け——逢魔ヶ刻の世界を垣間見たのです。

「立ち止まるな——!!」

グイン! と強い力で引き戻されるかのようにして、少年は元いた祭壇の上で目を覚ましました。マヨイが血相を変えてこちらに向かつて走りよつて来るのが見えます。未だふらふらと地に足付かずの少年が気の抜けた顔をしていると、地面の真下が何やらガタガタと音を立てて揺れ始めました。

「間に合わない、そのまま飛べ!」

ようやく恐ろしい状況に陥っていることを理解した少年は、言われるがままにボンと高く飛び上がって見せました。するとたちまち真下の大地が割れて、その亀裂からおぞましい、巨大な辰の頭が飛び出してきました。辰は、大きく口を開けています。何も出来ずに落下していく少年の体を、「捕まれ!」と間一髪のところマヨイの腕が引き上げました。

二人は辰の角にしがみつき、天高く大空に飛び立ちました。辰は開いた口からさらに光るガラクタのようなものを吐き出しながら、上へ上へと昇っていきます。

「なんだ、これは!」と少年はマヨイの背中に向かつて声を上げました。

「あなたが以前言つた通り、禍津日神とは善惡の両方を司る。謂わばこの辰は、禍津日神の善の姿だ。」

「善の姿……」とマヨイに捕まりながら後ろを振り返り、少年はその長いからだを尾の先まで見据えました。蛇のようなによるによるとうねる体の表面は、どうやら鉄くずや錆びた鉛、銅などで出来ているようでした。とても重たく、硬いので、動く度にがらがらと音がして少しずつ体が崩れ、地上に落ちていきます。そして、少年の座っている角の生えた真下には、金箔を散りばめて石と混ぜ、切つて貼つたような丸い目玉がありました。それがぎよろぎよろと動くものですから、酷く不気味に思えます。生き物とも、廃資源の塊とも呼べるうな、そんなからだをした辰でした。

「良かった。私は友人の頼みをきちんと聞き受けることが出来そうだ。」

幾分か上昇も緩やかになつて風が落ち着いた頃、マヨイが首巻を揺らして言いました。振り返つてくれなかつたので、彼女がどんな顔をしていたのかは分かりませんが、なんだか微笑んでいるような声色でした。「見てご覧」と呼ばれて、少年はマヨイの背中から顔を出しました。すると、途端に目も開けられないくらい眩しい光が視界を遮り、「うわっ！」と咄嗟に少女の影に隠れました。

「ははは、どうだ。ちつとも寂しくなんかないだろう？ 私とあなた、二人で夜を明

かしたのだから。」

夜を明かしたときいて、少年は慌ててもう一度マヨイの背中越しに空を見ました。今度は慎重に、薄く開いた瞼の隙間から世界を確かめるように見つめました。

「——— 本当だ、本当だ！ マヨイ、これが僕の国の夜明けだ！ 君に見せてやりたかった景色だ、美しいだろう！」

長い前髪が振り払われて、羽織の頭中也吹き飛んで、少年はめいっばいに朝日を浴びました。今まで見せることのなかったとびきりの笑顔で、少年は肺いっぱい空気を吸い込みました。

「ああ、美しいね。」

マヨイもまた、日の出を見下ろしながら言いました。きつと彼女も喜んでくれていると思い、少年は嬉しくなりました。

「マヨイ、今度こそ僕は忘れないよ。夜が明けても寂しくないのは、君と一緒にいてくれたからだ。でも、これでお別れなんだね。君とも、僕の寂しさが染み込んだこの国とも。」

少年は朝日が地上全体を照らす前に、その全土を見ておこうと涙を拭いながら見下ろしました。マヨイと出会った背の高い煙突も、深い奥地まで続く廃工場が並んだ街

並みも、そこに散りばめられた溢れ出るガソリンのオレンジも、全てに少年の悲観な思いが染み込んで見えました。その暗闇が少年を苦しめていたのは確かですが、少年の悲しみや寂しさに、いつもくつついて寄り添っていたのもまた、同じ暗闇です。

「さようなら、真夜中の王国。」

少年はそう呟いて、少しずつ夜が明けていく王国に手を振りました。真夜中の王国もまた、王との別れを惜しんでいるように見えました。

辰は王国の上をひゆるると何周も飛んでいました。太陽が完全に姿を現し、どこを見たって朝だとわかるくらいになると、急に力を失い降下していききました。速いような、遅いような、少年にはどんな速度で落ちているのか分かりませんでした。その最中に、マヨイがようやく振り返って顔を見せてくれました。けれどもその表情は、穏やかとは言えない、憂いを帯びた悲しげなものでした。

「まつりの義が終われば、私は完全に自我を失うだろう。次にあなたの目に映るものは、私でも、神でもない。まつりのもののけだ。」

まつりのもののけ——と、ぼやける視界の中で少年は繰り返し呟きました。また気が遠くなっていき、どんどん聴力が失われて、マヨイの喋っていることがよく聞き取れません。どうしてそんなことを言うのか。まだちゃんとお別れをしていない。なに

か最後に大事な言葉を送りたい。眠るものかと必死に目を開け、マヨイの逆さまの顔を見つめます。ぼたぼたと額に暖かい感触がしました。マヨイの涙でしようか。それとも、少年自身が流した涙でしようか。

「だけど、安心していいのだ。この国の誰もがあなたを憶えていなかったって、私はあなたを忘れない。夜明けのこないこの国に太陽をもたしたのは、紛れもなくあなただということを――」

ああ、おしまいが来てしまった、と消失感に飲み込まれて気づきました。とうとう何も聞こえなくなつて、少年は深く沈むような心地で意識を手放しました。なんだか酷く、悲しい気持ちでいっぱいでした。この柔らかな朝の匂いと共に、ずっと宙を漂っていたい……そう思いました。

ぱり、ぱり、と音がして、少年は重たい臉を持ち上げました。キキキ…キキキ…とそこかしこで蜩が鳴いていました。首を捻ると、咲き乱れた彼岸の花の中心で、少女の背中が丸く縮こまっているのが見えました。何かを一生懸命拾い上げて、貪っているようです。

「マヨイ——…」と掠れた声で少年が呼びました。思うように声が出ません。体も鈍痛が酷くて持ち上がりません。地に転がった指を動かすと、ぴちやりと水面を搔くような音がしました。どうや少年は、水溜まりの上に倒れているようです。その鮮やかな赤が自分の血液だとわかった時、少年は全てを理解して少女の姿を安らかに眺めました。

降り出す夕立の中、少女が振り返りました。

両手には、少年の羽織に縫い付けられていた鱗が大量に握られていました。そしてそれをむしやむしやと喰らい、奥歯で噛み砕いて少年のそばまでやってきました。

「マヨイ……」と少年は残り少ない力で微笑みました。少女は黙ったまま舌で口周りの血痕を舐めとると、乱暴に少年の羽織の尾鰭に齧りつきました。

少年は近くにあった自分の綺麗な鱗をそっと拾い上げて、「マヨイ、これは……」と笑みを浮かべたまま差し出しました。

——鱗の一枚、食わずに持っていて。

やがて力尽きた少年を、少女の両眼がじっと見下ろしていました。そして彼の指に挟まった綺麗な鱗をつまみあげ、躊躇うことなく口に放り込みました。その一枚でそんなに抑えられなかったはずの空腹が満たされて、何故だか涙が溢れてきました。ぼろぼろと大粒の涙が、彼岸の色をした真つ赤な瞳いっぱい膜を張って、まるで少年の亡骸を隠すかのようにして視界を覆いました。

……鉄の匂いが混ざった潮風が、マヨイの鼻を掠めました。

ここに海はありません。けれども確かに、海を求めて彷徨う魚の匂いが、この場所にはひたひたと漂っていたのです。

禍々

天体が動き出し、その国にも朝が来て、夕焼けを経て夜が訪れます。目まぐるしく変化していく毎日に、人々は忙しく生きています。その日々にいつか終わりが来るのを知っているからです。

「……いつてしまわれたか。」

美しい夜明けを眺めながら、背の高い煙突の上で少女が呟きました。色鮮やかな王国の景色を、誰かに見せてやりたいと思いました。

まつりの義が成功して、この国の小さな王様の願いは叶いました。緑の生え揃った大地で子供たちが元気に駆け回り、日が暮れて家に帰ると家族揃ってご飯を食べるのです。廃都市だった街並みもすっかり活気に満ち溢れ、いつしかガソリンなど溢れ出ることもなくなりました。

「少年よ、私はね。この国の光るオレンジが好きだったよ。」

すっかり暗くなって人気が薄れると、決まって少女は煙突に腰を下ろし空を見上げました。星が輝いてる様が、まるで少年の羽織っていた魚の鱗に見えました。

「——おいしかった？」

りと鈴の音が鳴って、どこからかそんな声がしました。少女は驚いて振り返りました。

「私はおいしかったよ。」

意図せずぱくぱくと動く口。呆気を取られて、少女は自分の唇に手を添えました。先程から語りかけてくるこの声は、確かに自分自身から発せられたものだったのです。

「お前が殺したあの子、おいしかったよ。」

「黙れ！」と少女は叫びました。体内にいる禍津日神の人格が、勝手に宿主の口を使って喋っているのです。体の中がふつふつと熱くなり、怒っているはずなのに笑いが止まらなくなりました。怒りと可笑しさで腹が振れ、気分がどうにかなってしまいそうでした。

「マヨイ、悔やむことはないよ。あの子は大罪人さ。私よりずっとひどい鬼さ。彼が話した童話とやら、きつと自分の話をしたんだね。」

そんなことあるものかと、マヨイは身体の内側に潜む厄災の神を睨みました。やつが世迷言ばかり言って、少女の大切なものをぞんざいに扱うことが許せなかったのです。「ずっと大人しくしていると思っていたが、性根は変わっていないみたいだな、マガ

ツヒよ。そこにいるなら分かると思うが、彼がいなくなつて百年、私は生きる意味を見い出せなかった。お前もこんな人間に取り憑いていたんじや退屈だろう、いい加減、楽にしてくれないか。」

マヨイは細い煙突の縁にしゃがみこんで、お腹を抱えて蹲りました。そうです、この王国は、少年の願いが叶つてから既に百年も経つていたのです。マヨイはずつと、一度も人里に降りることはありませんでしたが、どこにも行くことなくこの王国を見守ってきました。誰も知らない名も無き王様の代わりに、この国の行く末を見届けていたのです。

人の寿命には限りがあります。それこそ、神頼みでもない限りは百年なんて月日、この時代では生きられるはずがありません。マヨイが禍津日神と離れるということは、今まで神様の力で生かされていた膨大な年月を一瞬にして失うことになるのです。ただでさえ騙し騙しで生かされているガラクタのような体が、神様無しで形を保てるわけがありません。

「わかつていない訳では無いね。」と禍津日神が言いました。マヨイは自分の口を押さえつけるようにして、深くため息をつきました。

「孤独と退屈が、私の命を蝕んでいる…、このままじゃ、私は生きながら死んでしま

う。」

「そう言つて高い煙突の真下を、虚ろな瞳で見据えました。地上なんて、もはや見えませんでした。」

「それつて、ねがいごと？」

けたけたと笑う禍津日神に、マヨイは何も返事をしません。思考回路が酩酊し、憤りすら溶けて消えてしまったようでした。

「分かった、では左様なら、マヨイ。」

リンと強く鈴が鳴つて、目眩と共に辺りが突然明るくなりました。禍津日神の聲がするのに、マヨイの口は閉じています。つまり、彼女の口ではないどこからか話し声がしたのです。ずっと下がつていた視線が、つま先のすぐ下の深淵と目が合いました。どこかで見たような、金箔をまぶした石の塊がこちらを見ていました。「辰……」とマヨイが呟くと、禍津日神がクツクツ喉を鳴らして笑います。厄災の神はもう、マヨイの体内から出ていったようでした。

「食べてあげる、可愛いマヨイ。あなたのねがいを叶えてあげる。」

ばつくりと大口を開けた禍々しい辰が、マヨイの体が放り込まれるのを今か今かと待ち構えています。少年と二人でこの辰に乗り、空を飛んで回ったことなんて嘘のような心地がしました。

——臆気な意識の中、マヨイは彼岸の花園で無邪気に笑う子供の姿を見ました。自分とそっくりなからだをした、禍津日神でした。マヨイの体がゆつくりと傾いていきます。空は茜に染まっていました。夏の虫の鳴き声と、生ぬるい風が吹き抜けていました。吸い込まれていくように、それを受け入れるように静かに目を瞑り、マヨイは星の降る速さで煙突から落下していききました。辰に飲まれる直前、少女は密かに少年の夢を見ていました。それは暖かな、春の息吹を感じる夜明けの夢でした。深い眠りに落ちていく少女を、少年が迎えに来てくれたようでした。

孤独に恐れていたのは、少年だけではないのです。誰よりも遥かに多くの別れを見送ってきた少女もまた、残される悲しみを抱いて生きてきたのです。「神様」と呼ばれた一部を失つてようやく人に還った時、マヨイは自分自身が幼き頃から泣き虫だったことを思い出しました。ようやく全てが終わるというのに、余計なことを思い出したと笑いが溢れました。けれども一緒に、涙もぼろぼろ止めどなく流れてゆきました。

夢微睡んだ視界の中で、「私も飛んでいるよ」と呟いて、明けの空を割くように飛ぶ鳥を眺めました。羽の黒い、美しい鳥でした。少女にはその鳥が、たしかに少年に見えたのです。

日の出輝くこの国で、王の帰りを待ち続けてきた少女。そして今日、彼女に迎えがやって来ました。祝福の鐘、地獄の業火、全てが二人を包み込んで彼岸の向こうへ追いやりました。こうして少女の願いは叶い、この物語は一切の幕を閉じるのです。

「何も知らない、何も知らない。」

空も海も花も風も、みんなあなたの味方した。

何も知らない孤児^{みなしご}の、飛べないあなたの味方した。

何も知らない、何も知らない——」

昨日までの世界と何ら変わりのない一日の初めに、厄災を司る無邪気な神様が詩を送りました。澄み渡る青空を背後に、唐草模様の襟巻を靡かせた赤獅子の神様です。「仏などはいない、祈りなどは通じない。そこにはただ、善と悪が知らん顔で胡座をかいているだけに過ぎない。」

鼻歌を歌うように、軽快な足取りで煙突から煙突へと飛び移る神様は、陽気に笑って地上の緑を見渡しました。

「さあ、審判のときだ！ たのしみだね、マヨイ。お前とあの子を、黄泉で閻魔が待つている。ああ恐ろしや恐ろしや！」

そうして厄災の神様は、辰に姿を変えて二度と戻らぬこの国から飛び立つのです。上空を舞った立派な金色の辰の姿を、その国の人々が偶然見えました。彼の人によって禍津日神は、王国が末永く繁栄していく吉兆の兆しとして今世まで語り継がれてゆきました。

嘘も誠も紙一重。言い伝えも、この物語でさえも、真実は神様だけが知っています。そして神様は決して、答え合わせはしないのです。

まつりのもののけ 終幕